

『K君とのマンツーマンスキー』

先日、予定をしていた協会のスキー指導員が腰痛のため、急きょ代役でK小学校のスキー授業を応援しに行くことになった。

K小学校は、児童数が約100名、2月に高学年と低学年に分けスキー学習を実施している。5年前からこの学校のスキー学習に関わってきているが、今年は会議続きで予定に入れていなかった。

当日の朝、バスに乗り込む前に担当の方から子ども達の班割と指導者の分担表が配られた。私の担当は5年生1名になっている。この学校はスキー学習が行われて久しい。ということは他の学校からの転校生か、ではどう指導するか等などバスの中でいろいろ考える。あれこれ考えても仕方がないのだが、やはりいろいろ想定している自分がいる。

バスの中でも、バスを降りてからも、この児童についての情報がどなたからももたらされなかった。通常、一人を受け持ってもらう場合も含め外部の指導者には、これまでの経過等説明があって叱るべきなのだが…。授業が間もなく開始されるという段階で業を煮やし、教頭にどんな子でどんな指導をしてきたのか尋ねると、「わからない!」という。担当の先生に聞きにいくとその子のことは詳しく分からないという。担任に聞いて初めて、転校生であること、初めてスキーをはくこと、前日平地を歩く練習をしたこと、八の字の意味が分からないとのこと等がわかった。

当の児童が私の目の前に現れる。運動が嫌いではなさそうな感じのする児童だ。最初に確認したことは、「スキーやったことありますか。」だ。K君曰く、「何回かあります。」この一言でまずは安心。と言っても彼の言う「あります」は平地での歩行のみ。もう一つ、「リフトに乗ってみたいか」を問うと、当然「乗ってみたい」だ。

せっかく大きなスキー場に来たのだから、リフトやゴンドラに何とか乗せてやりたいのが親心。ところが、技術が伴わない状態で無理して急な斜面を降ろすと、恐怖感のみ与えかねない。そのためは、身につけなければならない技術があることを伝え、にこやかにOKと応えた。

この返答でどの程度の指導が可能か模索しながら、スキーを担いだままのK君をごくゆるい斜面へと誘導し、まずはスキーの着脱を診る。着脱は大丈夫そうだ。

K君の着脱の様子、スキーをはいた状態を診ると“滑る感覚”を楽しんでもらうことが一番いいと判断、ごく緩い斜面を八の字で滑らせる。滑っては登るを数度繰り返す。その中で登坂のコツを教えると、運動神経もいいものがあるのだろう、すぐに自分のものにした。なんとか第一関門“八の字滑走”から“止まる”がなんとかできた。

「リフトに乗ってみようか」と誘う。いいよと誘いにのってくるK君。初心、それも今日初めてスキーで斜面滑る経験をすることになる子どもをリフトに乗せるには私にも覚悟がいる。

スキーを好きになってもらうか、イヤな気持ちにさせてしまうかの瀬戸際。例年の2月の今頃だともうこのスキー場は下の氷の層が顔を出しガリガリ状態なのだが、幸いなことに昨日も降雪があり、斜面状態が非常にいいように見えた。リフトの乗り降りの仕方を指導しながら、上の斜面に到着。予想より斜面の雪の状態はいい。これならなんとか嫌がられずに降ろせそうだと判断しながら、K君と最終目標「楽しく、先生の力を借りずに滑り降りる」を設定する。

リフトを降りて直ぐに、やや斜度のある斜面が登場する。「滑ってみたい」気持ちのほうが悪かったのかすぐに滑ろうと私の前に来る。スキーを八の字にキープしブレーキをかけながら、ゆっくりとゆっくりと降ろす。私はK君の方を向き（斜面に後ろ向きになって）下を向かせないように、不安を少しでも軽くしてやれるよう配慮しながらサポートする。間もなくもっと斜度のきつい250メートルほどある斜面に差し掛かる。ここが降りられたらどこの山の斜面も降りられるという手ごわい斜面だ。それでもK君怯むことなく降りようとする。何度も何度も転ぶが、「転びながら上手になろう」が合言葉だ。斜面半分ほど進むとやや斜度が緩む。そこまで来るとK君に余裕が出たのか言葉が弾んでくる。

ここがチャンス。ターンのキッカケを覚えるタイミングになった。ここまではスピードをコントロールしながらまず止まることが第一目標。次はターンしながら少しは楽に斜面を降りてもらうこと。下を見ないで先生の滑るほうへついておいでと誘う。体の操作は一切教えない。教えなくてもついてこれるのが子ども達だ。私の5歳の孫も同じ要領で私の後について滑ってくる。K君もターンが始まった。スキーが左右に曲がりながら斜面を降りられる自分にびっくりしつつ、「楽しいー」といいながら滑っている。

K君が生まれて初めてのゲレンデでのスキー体験だ。ここまで午前中はお仕舞い。約600メートルの斜面を降りてくるのに50分の時間を要した。あとは滑る経験を多く積ませるだけ。

午後は私の補助をもらいながら同じ斜面を30分、20分で滑り降りてこられた。ここでK君足が張ってきたと申し出たので20分のお茶タイム。このお茶タイムは足の疲労回復に効果的だった。最後の一本、なんと同じ斜面、私の手を借りることなく滑り降りるK君の姿に私の方が感動した。目標達成、子どもの力恐るべしである。

これには後日談がある。5日後また同じ山でスキー学習があった。その日、K君はゴンドラに乗り、4キロのコースを八の字でゆっくりとターンしながら4回滑ることができた。それも私の手助けをほんの少し受けただけで。

子どもの内なる力は凄い。でも、それを引き出すためには周到な計画と準備が必要であることは言うまでもないこと。だがである、それを学校がどれだけやっているかが今問われているのではなかろうか。

私がスキーの指導員だからK君を任されたのであろう。それはいいとして、一番指導に手のかかる児童を任せておきながら、同行していた担任をはじめ周りの教員からK君についての言及が少なかったのは、どうにも合点がいかなかった。私にはとっても楽しいK君との出会いであったが。